

vivo

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴォ]

1&2

JANUARY / FEBRUARY
2004

CONTENTS

ニュー・イヤー・コンサート 2004	1
兼氏規雄 & 日本のうた セミナー	2
ATM アンサンブル 第19回演奏会	3
アンサンブル・ノマド	4
ちょっとお昼3&ファミリー・ワークショップ	5
最近の公演から	6
ネットマ & Petite 情報	7
インフォメーション	8



ニュー・イヤー・コンサート2003より

新年から「ウィーン」でめでたく大吉。大物出演者続々決定。 1 / 5(月)ニュー・イヤー・コンサート2004

「ついに水戸芸術館も禁断のネタに手を出したか!」というお声が聞こえなくもない(笑)今回のニュー・イヤー・コンサート2004、そう、お題は「ウィーン、夢の輪舞(ロンド)」でございます。いやーさすが禁断の果実(?)、月曜日で休館日の演奏会にもかかわらずすごい人気、12月上旬なのにこのペースなら売り切れ確実というところまで来てしまいました。チケットまだお買い上げでない方、ここまで読まれたところでちょっと中断、即座にお電話かメールされることをおすすめいたします。ほんとは。

(5分経過)無事にチケットはご購入いただけましたか?それでは次に行きましょう。「にしてもなんでウィーンなんだ」という疑問をお持ちの方、いらっしゃるかもしれません。かの地でやられるニュー・イヤー・コンサートの影響か、ここ日本でも新年にはあちこちでウィーンの名を冠した演奏会を聴くことができます。そんな中、いろんなテーマでやってきた水戸芸術館が今年ウィーンを選ぶとは、なにか深い理由があるに違いない、そうだろうように違いない。...わかりましたお答えしましょう、**別にありません。**...いやそれはさすがに語弊があるかな、「イタリア」「ダンス」「世界めぐり」「祝祭」「ラテン」いろんなキーワードをめぐってきたニュー・イヤー・コンサートが今回立ち寄った港、それが「ウィーン」だったということです。

この楽都からはたくさんの音楽が生まれてきました。ワルツやウィーナリート以外にも、古くは

17世紀ハプスブルク宮廷の音楽、18世紀のモーツァルトや19世紀のベートーヴェン、シューベルト、ブラームス、20世紀の新ウィーン楽派...なんとまあ、こうして書いてだけでも音楽史の直球どまん中ストライク連発状態ではありませんか。ちょいと名曲名作を取り上げただけでも、コンサート5000回分くらいのメニューがたちまちできてしまうわけです。この街の音楽で新年を飾りたい気持ちが芽生えるのは、ごく自然なことでしょう。

とはいえウィーンの音楽史を繰ざらえるようなことを、このニュー・イヤー・コンサート(この名前長いですね、この辺からNYCって略称にしましょう)でやるつもりはありません。かといってワルツやオペレッタばかりになるわけでもない。専属楽団のおなじみの名手たち、そして素敵なゲストの方々によって、ウィーンのいろんな顔の音楽をほとんど楽しんでいただきたい...それに尽きるのです。

さてその出演者。いつものメンバーに加え、今回もゲストは絢爛豪華です。まずソプラノの高橋薫子さん。3月の《奥様女中》でもヒロインを歌う高橋さんは近年のブランク 声やグノー ロミオとジュリエット 公演における名演など、間違いなく今もっとも日本で輝いているソプラノのひとり。ピアノはNYC初登場の野平一郎さん。作曲家としてピアニストとしてこれまた国際的に多忙を極める野平さん、芸術館にはすでに何度か登場し鋭利で深い洞察力に満ちた名演を聴かせてきています。ギリシャの哲人のような風貌の野平さん

も、今回の演奏では優しい笑顔を見せてくれるかもしれませんよ。さらにチラシ完成後決まったゲストは、トランペットのデイヴィッド・ヘルツォークさん、クラリネットの鈴木高通さんといういずれも新日本フィルの中心的な奏者。フルートの岩佐和弘さんは2001年ヨーロッパ・ツアーで武満徹 マスク を工藤重典氏と共に演奏されています。こうした水戸室内管弦楽団の演奏会ではおなじみのゲストの方々に加えて嬉しいことに、マスター・オブ・ヴィオラ、店村真積さんが久々にNYCに振り返ってくださることが決定しました!さらにヴィオラは昨年に引き続き吉田有紀子さんが登場しますし、中村静香さんが今回もヴァイオリンとヴィオラを鮮やかに弾きこなしてくれます。そして名器シュッケのポジティブ・オルガンを、プロムナード・コンサートやオルガン名曲ライブラリーで名演を聴かせてくれた高橋博子さんが!さらに司会ですが締切直前に届いたビッグニュースをお伝えしましょう。今や2003年紅白歌合戦の司会を務めるなど人気絶頂のNHKのアナウンサー、膳場貴子さんです!

曲は何をやるって?まあNYCは「福袋」ですから本番までお待ちください。とにかく**名曲、名曲、また名曲...**です(でもたとえばワルツといっても、ただのワルツじゃないかもしれません)。あ、「大吉リクエスト」の結果もお楽しみに。ともあれ、いらっしゃるすべての方々にとって「大吉」のコンサートでありますよう!

《矢澤》

写真左より;
兼氏規雄、小坂圭太
日本のうた セミナー



聴き応え十分のプログラムでお届けするクラリネットの夕べ 1 / 17(土)兼氏規雄クラリネット・リサイタル

県内在住の演奏家による企画シリーズに個人としては3回目の登場となるクラリネットの兼氏規雄さん。個人とは言っても、過去2回は水戸室内管弦楽団のメンバーを加えた室内楽編成のリサイタルだったので、今回は待望の単独リサイタルとなる。兼氏さんは、「クラリネットの名曲という、まずモーツァルトやブラームス等の五重奏曲が挙げられますよね。そうした室内楽の“超名曲”からはじめて、その後にピアノ伴奏のリサイタルを、という構想を持っていました。音楽そのものを楽しんでいただけるようなプログラムをいつも考えています」と語る。

読売日本交響楽団のクラリネット奏者であったお父様の影響で、中学生の頃にクラリネットをはじめた兼氏さん。楽器のことに話題が及ぶと、身を乗り出すようにその魅力を話してくれた。「クラリネットの魅力は、まず音域の広さでしょう。他の管楽器とは違い、閉管のシステムを採るので、オクターブが8度ではなく12度になります。実際、管の下は開いているのに、なぜパイプオルガンと同じ閉管の鳴り方をするのかは、不思議なことに現在に至っても未だ説明されていません。クラリネット

は、その広い音域がそれぞれ独自の音色を持っているのも魅力です。高い音域は明るく、おどけた表情も出せます。ファゴットの音域までカバーする低いほうは、深みのある音色を持っています」

クラリネットには大きく分けてフランスとドイツの楽器があり、同じクラリネットとは言っても「それぞれ違う名前が与えられていてもおかしくない」ほどに、構造も音色も違うのだそう。日本では圧倒的に多いというフランス式を使っていた兼氏は、東京芸術大学卒業後、ドイツ・ミュンヘンに留学し、初めてその違いを目の当たりにする。「フランスの楽器は機能的で非常に演奏しやすいのですが、ドイツの楽器は本当に上から下まで太い音色で、こちらがフランスの楽器でどんなにがんばっても追いつけないものがありました。どう演奏したらドイツの楽器を越えられるかと、いろいろ考えたときに出てきたのがヴィブラートです。ヴィブラートをかけて音色の幅を広げるしかない、と。日本では、ヴィブラートはかけないで演奏するのが一般的なもので、そういう意味からすると異端です(笑い)。クラリネットでヴィブラートをかけるのは非常に難しい技術で、満身に使えるようになるまで

3年の研究を要しました。」

お父様から「クラリネットの演奏で参考になるのはテノールだ」と教えられ、ミュンヘン留学時代はオペラ・ハウスに通い詰めたという兼氏さんが今回のプログラムで一押しするのは、パッシ作曲の「ヴェルディの リゴレット の主題による幻想曲」だ。「リゴレット の中に出てくる有名なメロディが5つ登場し、それぞれに超絶技巧が施されたヴァリエーションがつけます。これは理屈抜きに楽しめると思いますね」プログラムの最後を飾るブラームスのソナタ第2番も、兼氏さんにとっては大切な1曲。「ブラームスが晩年に書いた作品で、長調で響き自体は明るいのですが、どこか物悲しく、哀愁に満ちた感じが漂っています。モーツァルトがやはり晩年に書いたクラリネット協奏曲と共通性を感じさせる作品です」

共演に、「ピアノで歌うことが出来る人」と兼氏が絶大な信頼を寄せる小坂圭太さんを招き、万全の態勢で臨む今回のリサイタル。「絶対飽きさせない楽しいプログラムですので、ぜひ聴きにいらしてください」と力強く締めくくった。

《関根》

親しみ易さに溢れた中田喜直歌曲の魅力の源泉を探る 1 / 18(日)畑中良輔の 日本のうた セミナー「中田喜直」

前回の「別宮貞雄」で、第二次世界大戦後に突入した当セミナー。本年度の締めくくりとなる今回は、戦後日本歌曲界の第一人者・中田喜直を研究します。

中田喜直(1923～2000)は、ときに「日本のシューベルト」と言われるほど、稀代のメロディ作家でした。そのほとんどの歌曲が高い芸術性を持ちつつ、庶民的な親しみやすさ、言い換えれば「うた」としての根源的な魅力を手放さなかつたところも、シューベルトとよく似ています。今回のセミナーの研究曲である歌曲集「六つの子供の歌」「霧と話した」などは、芸術的先鋭性と親しみやすさが高い次元で融合した中田の代表的歌曲です。また、「めだかの学校」「夏の思い出」「ちいさい秋みつけた」「雪の降る街」などは国民的愛唱歌と言ってもいいでしょう。中田喜直は、3年前に惜しまれつつこの世を去りましたが、これらの名曲

は永遠に人々の心に刻まれていくに違いありません。

講師の畑中良輔氏は、東京音楽学校(現東京芸術大学)で中田喜直のクラスメートであり、シューベルト、シューマン、ヴォルフ、ブラームス等の歌曲と一緒に勉強、演奏していたそうです。互いに音楽家として自立した後も、戦後新しく起こった作曲グループ「新声会」のメンバーとして一緒に活動したり、海四章「四季の歌」などの中田の作品を畑中氏が初演したりしました。中田喜直と強い友情の絆で結ばれていた畑中氏だけに、本や楽譜などには書かれていない貴重なエピソードが紹介されそうです。

当日のゲスト歌手には、ソプラノの大島洋子さんをお招きしています。大島さんは、「オペラの花束をあなたへ」、「オペラさんせう太夫」、「クリスマス・コンサート」などで水戸芸術館に登場、透き

通るような美しい歌声を聴かせました。また、オペラだけでなく、日本歌曲にも定評があり、当セミナーでも第1期「山田耕筰II」にゲスト出演、歌曲集「風に寄せてうたへる春のうた」できめ細やかな歌唱を披露してくれました。今回は、「四季の歌」や「こどものための8つのうた」からの抜粋が歌われる予定です。

また、受講生4名に加え、半世紀以上の長きにわたって水戸で日本歌曲を歌いつづけてきた中澤敏子さんが特別参加します。現在、数多くの合唱団や童謡を歌う会の指導者として活躍していますが、歌手としても現役であり、2000年には第11回奏楽堂日本歌曲コンクールにおいて奥田良三賞を受賞、昨年3月には水戸芸術館でリサイタルを成功させました。中澤さんの味わい深い歌唱にも期待しましょう。

《関根》



写真左よりゲストの5名
(川本嘉子、山本亜希子、
濱崎由紀、岩佐雅美、高橋臣宣)

聞いたことがないのに懐かしい音楽、ヤナーチェクを聴いてみませんか。 2 / 1(日)ATMアンサンブル第19回演奏会

チラシにご注目

まず、すでに先月のDMで届いている、お手許のATMアンサンブル第19回演奏会のチラシをもう一度ご覧ください。チェコの作曲家レオシュ・ヤナーチェク(1854～1928)の肖像に、たくさんの固有名詞がかぶさっています。これは全部ヤナーチェクの曲名です。消えた男の日記とかプロウチェク氏の旅行といったタイトルはこの上なくユニークかつ魅惑的すぎて、クラシックの曲名というよりはなんだか映画のタイトルのようなですね。

そして、その音楽はタイトル以上にユニークで楽しいものです。芸術館のコンサートに何度かその曲が登場する度に、アンケートに「ヤナーチェクってこんなにいい曲を書いたのか、もっと聴きたい」というお言葉を発見することしばしば。そのたびに「どうしたら、この人の音楽のすばらしさをことばに置き換えられるのだろう」と思ってきましたが、今回ATMアンサンブルが生誕150周年を記念するヤナーチェク・プログラムの演奏会を行うにあたり、ひとつ形容する文句を思いつきました「聞いたことがないのに、懐かしい音楽」。

自然のかたわらにいる音楽

その懐かしさはどこから来るのでしょうか。たぶん、彼の音楽が人間をふくむ自然界の森羅万象の「生命の核」らしきものから生まれ出ているからではないでしょうか。ヤナーチェクのユニークな作曲法としてよく知られているのが、彼が街に出て人々のしゃべり声を譜面に書き写し、それを作曲の素材に用いたというものです。しゃべるといふ行為を追いかけることによって、ヤナーチェクは人間の感情がわきおこり人に伝わるその過程を、まるごと音楽で包み込もうとしました。その執念はすさまじく、愛する娘オルガが若くして臨終の床に就いたとき、その生命が消え行く最後の吐息まで採譜したということです。鬼のような父親? たぶんその反対でしょう。自分が持っているもっとも有効な手段、音楽を通じて、彼は死にゆく娘にできる限りの悲しみの表明を行ったのです。そこに愛があることは、結果として生まれた悲痛な名曲我が娘オルガの死を悼むエレジーを聴けば明らかです。

その愛のまなざしは、人間以外の自然のすべてにも向けられます。それはオペラ 女狐ピストロ

ウシユカの物語にもっともよく表現されています。賢く美しい女狐ピストロウシユカと動物たち、人間たちの出会いや別れを描く物語、と書いたらディズニーのアニメーションみたいだ、と思われるでしょうか? じっさいには「擬人化」されたディズニー・アニメと対極的な世界がそこにはあります。吉田秀和館長の言葉を借りましょう。名著『わたしの好きな曲』(新潮文庫もしくは白水社の全集第11巻)の中で、ベートーヴェンやモーツァルトの名曲にまじってこの曲が取り上げられ、こう書かれています「ここでは自然が音楽で描かれたり話の筋の背景をなしているのではなく、音楽そのものが自然と同じ素材からできている。自然と姉妹同士なのだ。」

ヤナーチェクの愛は、晩年ひとりの女性へと向けられます。38歳も年下の人妻、カミラ・シュテスロヴァー。ズデンカという奥さんがいたにもかかわらず! 今だったら「老いらくの大作作曲家、美人妻とダブル不倫!」とか週刊紙に書かれそうな話ですが、ヤナーチェクの創作力はこの恋愛によりすさまじく高まり、晩年の10年間に彼の傑作の大部分が書かれてしまうのです。カミラのイメージが投影されている作品はたくさんあります。消えた男の日記 トルストイの「クロイツェル・ソナタ」に靈感を受けて カーチャ・カヴァノヴァー マクロプロス事件 そして 女狐... もそう。そして彼がその生涯の最後に、純粋なラヴ・レターとして書いたのが、今回ATMアンサンブルも演奏する弦楽四重奏曲 ないしょの手紙 です。これは、音楽史上もっとも美しい「純粋器楽によるラヴ・レター」のひとつではないでしょうか。ことに第3楽章、ヤナーチェクが「私のもっとも美しい旋律のおき場所をみつけた」と書いたあたり、まさしく愛の感情が大地を震わせるかのようです。

ちなみにヤナーチェクの死因は肺炎でした。これは、カミラと彼女の子供と、夫公認(!)ででかけた避暑地で、迷子になった子供を探して雨に濡れたせいなのです。なんとヤナーチェクらしい生の終え方、というべきかもしれません。でも奥さんはたまらないですね。実際、ヤナーチェクの死後、彼の残した作曲遺産をめぐるズデンカとカミラの間ではかなりシビアな対立が発生したようです。罪なお爺さんです、まったく。

さてここまで書いてきて「なんだか文章がどん

どん展開というか逸脱していくなあ」と思われた方、その通りです。ヤナーチェクの音楽の展開を、ちょっと真似してみました(まあ比べるのもおこがましい話ですが)。彼の音楽は、起承転結の論理に従って発展していくというよりも、植物のように旋律の芽がどんどん伸びて自然に大きく育ち、大輪の花を咲かせるような展開の仕方をみせます。そして、どんなに予期せぬ方向につるが触手を伸ばし、見慣れぬ花がぽっかり咲いても、最終的には美しいひとつの形をなすのがみごとなところ。このあたり、起承転結の論理でがっちり組み立てられた西欧クラシックの音楽よりも、私たち東洋人にとって不思議に聴き易いのです。ヤナーチェク音楽の最初の聴き手が東洋人だったら「素人の音楽」なんてとんでもない評は生まれず、もっと早くヤナーチェクはメジャーになっていたかも?

曲目と出演者たち

さて今回のATMアンサンブルは、ゲストを迎えた総計10人でヤナーチェクに挑みます。おとぎ話とヴァイオリン・ソナタでは、上村 昇と加藤知子のふたりをたっぷりフィーチャー。2人のファンの方はぜひお聴きのがしなく。コンチェルティーノはピアノ、ヴァイオリン2、ヴィオラ、クラリネット、ファゴット、ホルンという珍妙な編成の作品。動物園を訪問したときの印象がもとになっているというユーモラスな曲です。ジュネーヴ国際コンクールで2位をとったピアノの山本亜希子の活躍に期待しましょう。クラリネット 濱崎由紀、ファゴット 岩佐雅美、ホルン 高橋臣宣という若手管楽器陣も楽しみです。そして最後は絶筆となった傑作、弦楽四重奏第2番、ないしょの手紙。今回は豊嶋泰嗣がお休みをいただき、代わりに、現在ソロ・室内楽奏者としてもっとも活躍しているヴィオリストのひとり、川本嘉子が登場します。さらに『バルトーク』(中公新書)で吉田秀和賞を受賞した音楽学者・評論家、伊東信宏を迎えてのプレートクも行い、ヤナーチェク音楽の魅力を深く味わっていただきます。日本で(たぶん)どこよりも早く行われるヤナーチェク生誕150周年企画(1月31日に碧南公演もあります)。この機会をぜひ逃さず、生命の力に満ちたその音楽をたっぷり浴びてみませんか。あ、チョコレートもついてきますので、ポリフェノールもいっしょにとれます。《矢澤

写真左より;
アンサンブル・ノマド
池辺晋一郎、佐藤紀雄



理屈抜きで楽しめるアンサンブル 対談：池辺晋一郎 + 佐藤紀雄

2 / 21(土)現代音楽を楽しもう - XVII アンサンブル・ノマド

池辺晋一郎:2月21日(土)のアンサンブル・ノマドのコンサートは、僕が開館時から続けている「現代音楽を楽しもう」というシリーズの17回目にあたるものです。今回のプログラムは、約1年前に僕と佐藤さんとで飲み屋で、一緒に考えて作ったものです。水戸のお客さんも、そして現代音楽に普段接していないお客さんも、これを聴いたら「あぁなんて面白いんだ!」と、理屈抜きで楽しめるものを選びたかったし、そういう結果になっていると思います。ただひとつの疑問は僕の新作ですね(笑)。そこだけ未知数なのですが(笑)。

今日は主宰者である佐藤紀雄さんにアンサンブル・ノマドの結成の経緯をお話いただき、そして普段考えていらっしやるポリシーなども同時に披露していただければと思っています。

アンサンブル・ノマドの結成・新しい聴衆

佐藤紀雄:結成は1997年です。この若い演奏家の人達と一緒に仕事をする機会が、まず結成の前の時期にあって、僕がそれまでに一緒にやってきた仲間たちとは、随分違うなと感じました。それで、彼らとアンサンブルをやったら演奏の内容ももちろんそうだし、プログラムももっと自由に考えられるだろうと思ったのが結成のきっかけです。

今日まで活動をしてきてノマドが成功した要因の1つとして、社会が変わってきたと言えるかもしれません。また、純粹に演奏家だけから成る現代音楽のアンサンブルというのは、これまでわが国にはあまり無く、それがこのアンサンブルの最も大きな特徴の1つになっていると思います。このことにより初演等の義務感より先に、自分達が本当に演奏したいものをやれるのです。

池辺:その通りで、日本の戦後の演奏グループを考えてみると、現代音楽の演奏では作曲家がイニシアティブをとってきたよね。世の中が変わってきたというも確かにそうです。作曲家の立場で言うと、20世紀の音楽はある時期から長い間、密室に入ってしまったということがいえると思う。それは技術的な観点からも言えるんだけど、技術的なものが出尽くしたのがだいたい80年代に入った頃だと思う。それから過渡期を経て90年代に入ると、それが外に向かって開かれてきたと考えられます。そして、このことは演奏面でも同じで、この潮流に呼応するような演奏家が現れる時代になったと思う。それまで密室にあったものが外へ出てきて、つまり生命力を持ってきたのですよ。それは聴き手に伝わると思うね。聴き手は「そうか現代音楽って、向こうからこんなにアプ

ローチしてきてくれるんだ」と感じ始めたのです。この新しい聴衆を生む事になったすばらしさを水戸の皆さんにも味わって欲しいですね。

プログラムについて

池辺:ピアソラの音楽というのは、作曲がテクニカルにできているというのとは違う。だけど根っこがある。その根っこが強いから、主張が伝わってくる。そういう意味では、変な言い方だけどカロリーの高い音楽だよな。

佐藤:タンゴの歴史は、これまで僕らは何度も演奏してきている曲です。ですから即興的に色々なことが入る余地があって、きっと当日も2人で自分たちにも思いもつかないような面が出せるんじゃないかなど楽しみにしています。

池辺:ライヒは、手がけたCDが最も多く発売されている人気のある作曲家のひとり。ライヒたちが創案したミニマル・ミュージック(最少の音素材を使った反復音楽)は世界中の作曲家に影響を与えました。

佐藤:この曲は木片だけです。音色の変化は無いので、何に集中しているかというリズムですね。

木片の音楽で一番スリリングなのは、音楽が形成していく過程を皆の前で見せることができることです。最初に完成されたリズムが出てくるのではなく、次第に形成されていき最終的に整ったときに音楽が終わり次のステップに行く。そうしたプロセスを皆で聴くわけです。作曲のプロセスを聴かせる音楽なんて他には無いと思いますよ(笑)。

池辺:マウリシオ・カーゲルは現代音楽の世界ではビッグ・ネームだけれど、一般にはそれほど知られている人ではないかもしれない。

佐藤:カーゲルは常にセンセーショナルな作品を書いていて、それは例えば上演の方法や長さ、楽器法など、尋常では考えられないような作品を書いている。ところが「ルルル...」は、それらとは一線を画して、ヴァイオリン、クラリネット、ピアノというたった3人で演奏する、ちょっとスタンダード・ジャズを思わせるようなシンプルな作品です。タイトルの由来は、彼があるジャズ事典の「r」の項目からすべてヒントを得ていて、たとえばリズムとかリフとか、それを1曲ずつ形に表しているのです。

池辺:次は武満徹さんの「カトレンII」です。「カトレンI」という曲はオーケストラの為に書かれた、ソリストが4人いる協奏曲のような作品です。その4人のパートを取り出したものと考えられるのが「カトレンII」です。オーケストラと4人のソリストで演奏する時に何かある種のエッセンスという核があって、

その核だけを取り出すと、物体の結晶が見えるという感じなんだよね。つまりオーケストラが大きな物体だとすると、その結晶だけを見ているという感じでこの室内楽があると思う。

池辺:パートウィスルの編曲作品は、たとえばウェーベルンによるJ.S.バッハの6声のリチェルカレの編曲とは違う面白さがあるよね。

佐藤:オケゲムは、バッハ以前の時代に活躍した、おそらく一番複雑なポリフォニーの作品を書いた作曲家の一人だと思います。孤独な隠者のように、彼の他の作品と同様に、その複雑さにも関わらず、とても美しい調和をもつ曲です。パートウィスルの編曲は、それを現代の楽器に置き換えて、今言ったようなことを明確に浮かび上がらせています。また、事前に種明かしをすると面白いと思うのが、この作品のタイトルについてです。聖書の一説から取られたと思うのですが、実は最も目立たないパート、つまり最も動きの少ないパートが、孤独な隠者のさまを表しています。皆の中で最も目立たない存在なのだが最も重要であるという、当時の人たちの宗教観が読み取れそうです。

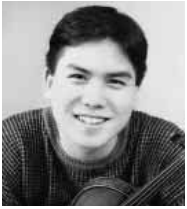
池辺:最後は僕の新作です。まだ完成していませんが、プランニングはある程度あります。水戸の公演の10日位後に初演するオーケストラの曲と、ある意味では一対になる曲になりそうです。あるひとつの方法論を室内楽でやり、かたやオーケストラでやるという形になると思います。それはいったい具体的には何かというのは難しいのだけれど、その発想を得たのは、今年の夏に、NHKのテレビ番組でたまたま訪れた新潟県の妻有トリエンナーレという美術展でのことです。広大な地域のあちこちの野外に作品が展示される美術展です。それが非常に面白くて、その幾つかの作品が棚田を利用していた。その棚田から発想を得たのです。それだけじゃ分かんないですよな(笑)。

佐藤:このアンサンブルは、できるだけとらわれずに自由に活動したいと思っています。プログラムもそうだし、場所も限定せず、色々な所へ自分達から出かけて行って、演奏をしたいと思っています。ですから今回、僕達は初めての都市である水戸の人たちに聴いていただけるのは、とても嬉しいですね。

池辺:じゃあノマドのコンサート終わったら飲もうだ!(笑)これが締め言葉ね(笑)。

《編集:中村》

水戸芸術館のホームページで、本対談のロングヴァージョンを掲載しています。



写真左から;
川崎洋介
ウォルフラム・ケッセル
ヴァディム・セブレリャーニー



小杉武久

MCOの期待の新星！川崎洋介とその仲間たちが登場します。 2 / 6(金)ちょっとお昼にクラシック3 ピアノ・トリオの大旋風！

平日の午後にお届けする1時間のコンサートそれが、「ちょっとお昼にクラシック」です。

今回は、「ピアノ・トリオの大旋風! ~世界を目指す若き才能~」というタイトルで、ヴァイオリン(川崎洋介)、チェロ(ウォルフラム・ケッセル)、ピアノ(ヴァディム・セブレリャーニー)による演奏をお楽しみいただけます。川崎洋介は、若干20代で水戸室内管弦楽団(MCO)のメンバーとして迎え入れられた次代のMCOを担っていくことを期待されている俊英です。共演の2人は、いずれも川崎洋介が是非とも水戸でも共演したいと推挙した演奏家です。ウォルフラム・ケッセルは、MCOのメンバーである田中直子(Vn)やモーリン・ガラガー(Va)が籍を置く、MCOのライバルでもある? オルフェウス室内管弦楽団にも参加しているチェリスト。そして、ヴァディム・セブレリャーニーは、川崎洋介が将来に渡って共演していきたいし、今回は自分の

ギヤラを削ってでもカナダから呼びたいというほど信頼を寄せているピアニストです。

まさに、世界の第一線の舞台へと駆け上がろうとしている若い3人が、登場します。

プログラムは、古典から現代作品までピアノ三重奏の名曲が贅沢に集められていると言えます。一番古い作品はJ.S.バッハのフーガの技法BWV1080のピアノ三重奏への編曲版。晩年のバッハによる対位法の技術の総決算とも呼べる不朽の作品です。そして、モーツァルト作品からは、協奏風の華やかさと室内楽の精緻さが同居したピアノ三重奏曲 K.502 が選ばれています。次にくる巨匠といえばベートーヴェン、神秘的な情趣をもつことから 幽霊 と称される ピアノ三重奏曲 第5番 作品70の2 が演奏されます。20世紀の作品からはショスタコーヴィチの ピアノ三重奏曲 第2番 作品67 が紹介されます。この曲は親友で

音楽学者のソレルチンスキーへの追悼曲として書かれた、透き通った美しさをもつ作品です。なお、これらの作品は、楽章の抜粋という形で演奏されます。

さらに、アンサンブル曲ばかりでなく、川崎洋介によるパガニーニの24のカプリッチョやヴァディム・セブレリャーニーによるドビュッシーの 水に映る影 などのソロ作品も取り上げられ、演奏者たちの華麗な技が披露されます。

また、スクリーンを使つてのある視覚的な演出も計画中です! それは当日のお楽しみ!!

《中村》

*託児サービスが有ります。1月16日(金)までに水戸芸術館音楽部門(TEL029-227-8118担当:中村、馬場)にお申し込みください。

大空にはばたく鳥のように自由な音たち

ファミリー・ワークショップ サウンド・ハンティング 2 / 29(日)小杉武久コンサート メディア・ミックス

「個的情念の資産をぞろぞろひっばって、きめられ、資産化されたレールの上をしか走り得ない音楽は、決して鳥のように無産の空間をはばたくことはない。またそのような意識で育てられた鳥は、確実に「石」にぶち当たって死ぬだろう。花が死に鳥が死に風が死に、月が死ぬ。所有された花はすぐに死ぬ。コンクリートの建物の中に私有されたツバメの飛行は可能か。風は所有されると腐る。大地の資産が空中にはばかまかれた時、月は姿を消す。そのようにして音たちも「かこわれた」時、無産の音たちの復讐を受けるだろう。」(小杉武久『キャッチ・ウェーブ』へのライナーノーツより)

小杉武久の音楽は「音楽」のあり方の根本を見つめる眼差しをもっています。小杉は音楽をわたしたち人間の所有物としてのあり方から解放し、より自然な状態に近づけようと考えています。

そして、彼のメッセージは、「音楽」のあり方にとどまるものではありません。私たちが生活を送るうえで、資産をもつことや所有の喜びというもの、大きな価値をもっており、ひょっとすると、それらは幸福を図るものさしのひとつになっているか

もしれません。勿論、人類の歩みを考えると、火を手に入れることから始まり、言語の習得、諸技術の開発など、文明というものは所有化の足跡であると言えるでしょう。したがって、その営みを全く否定してしまうことは、出来るはずがありません。しかし、現在の私達の暮らしぶりを振り返ってみたときに、資本主義経済の原理に則って、労働の対価としてお金を得て、そのお金で何か物を買う(=所有する)という営みに、あまりに支配され過ぎているのではと考えるのです。その一方で、お金では買えない何か、所有するということではない何か、大きな意味があるのではないかとこのことを、私たちは漠然と感じています。宇宙という果てしない存在や私たちの住む地球というものは、私たちがコントロールできないという意味で、人間の所有物ではないですし、自身の命はもちろんのことあらゆる生命というものも同様です。小杉の言う「無産の音たち」というのは、まさにこの果てしなき世界に息づくものなのではないでしょうか。

2月22日(日)、28日(土)、29日(日)に開催するファミリー・ワークショップ サウンド・ハンティング に参加される方も募集しています。お問合

せは水戸芸術館音楽部門(TEL029-227-8118担当:中村、馬場)までお願いします。

小杉武久氏インタビュー

- 今回のワークショップでどのようなことをやるのか、簡単にお教えください。

小杉:コンタクト・マイクとラジカセを用いて、身の回りの物や空間に潜む、普通の音楽の響きとは異なる様々な音をピックアップ(ハンティング)します。

- 演奏会ではワークショップを通して作られるコンタクト・ミュージック という新作が上演されますが、どのような作品になりそうですか?

小杉:参加者各自が選んだ物体を使って、コンタクト・マイクの操作による演奏を行います。また、この音は電子変調システムを通すことで、様々な変化することになります。

- 今回の演奏会のタイトルに「メディア・ミックス」とお付けになったご意図をお教えください。

小杉:光の媒体と音の媒体、エレクトロニクスとアナログスティック媒体をミックスすることで、多角的な表現の演奏を行います。

《中村》

最近の公演から
NOVEMBER



1



2



3



4



5



6



7



8

水戸室内管弦楽団第55回定期演奏会
(11月8日、9日)

水戸室内管弦楽団(MCO)第55回定期演奏会は、オランダの指揮者トン・コープマンを迎え、オール・シューベルト・プログラムでお届けした。曲目は、交響曲第5番、レーガー編曲による管弦楽伴奏版歌曲(音楽に寄せて、豎琴弾き3曲、魔王)、交響曲第7(8)番 未完成。MCOのメンバーにはもちろん、スタッフ1人1人までにも優しい笑顔で接するコープマンの人柄を表すかのように、音楽は終始屈託なく伸び伸びと息づいていた。コープマンというと、自ら創設したオリジナル楽器オーケストラ、アムステルダム・バロック管弦楽団の指揮者として有名だが、MCOに対してオリジナル楽器奏法を強く押し付けることはなかった。とは言っても、いつもよりヴィブラートを抑えて演奏したMCOサウンドの微妙な変化を楽しまれた方も多だろう。また、歌曲には、コープマンが絶大な信頼を寄せるバリトン歌手、クラウド・メルテンスが登場。正統的で美しいドイツ語と歌唱を聴かせた。アンコール曲は、レーガー編曲による歌曲 夕映えの中で と音楽に寄せて。《関根》

アンケートから MCOの持つ音、いつ聴いても素晴らしい。コープマンさんの感情のこもった指揮、メルテンスさんの 魔王 も良かった。(水戸市:T.M.さん) 個々の楽器と歌声が個性を主張しあい、それでいて調和の取れた演奏に感激しました。特に 魔王 では、背筋のゾクとくる感覚を覚えました。(那珂郡:Y.T.さん) 4年ぶりのMCO、最高でした!8時間かけて島からやってきたかいがありました。ppからffまで大きな音楽のうねりの中で存分に遊ばせていただいた気分です。(新潟県佐渡郡:T.K.さん) コープマンさんの音楽が直に伝わってとても良かった。メルテンスさんの歌声に涙が止まらなかった。ブラボー!(いわき市:S.K.さん) すばらしい。一音一音にける愛と音色の豊かさ、コープマンの表現力に酔った!来てよかった。シューベルトのすばらしさを再認識した。(無記名の方) ベートーヴェンと対極にあると思っていたシューベルトの音楽が、かくも構成力に富んだものであることを、本日の演奏に接するまで解りませんでした。トン・コープマンの見事な解釈とそれにピッタリつけるMCOの柔軟性と実力には今更ながら脱帽。メルテンスの艶のあるバリトンも聴きものでした。(横浜市:T.Y.さん) 魔王も、未完成 もすばらしい演奏でしたが、すばらしすぎて心が乱れたところ、やさしく美しいアンコール曲で救われました。(中略)最後までしっかり拍手をして、感謝の気持ちを表せる、この水戸のホールと聴衆はすばらしいと思います。(水戸市:無記名の方)

水戸室内管弦楽団第56回定期演奏会
(11月22、23日)

ゲスト・コンサートマスター & 独奏者にライナー・クスマウル氏を迎え、オール・モーツァルト・プログラムで行われた水戸室内管弦楽団(MCO)の第56回定期。元ベルリン・フィルのコンサート・マスターを務め、オーケストラの練習のあり方というものを知り尽くしたクスマウル氏だけに、リハーサルは、非常に効率よく、和やかな雰囲気の中で行われた。モーツァルトの演奏ということも加わって、MCOのメンバーたちは、クスマウル氏との共演を心からエンジョイしているように感じられた。MCOのメンバーたちとクスマウル氏が、それぞれの実力を認め合うことで、とても親密な信頼関係が築き上げられたのではないだろうか。クスマウル氏の意向により、第2ヴァイオリンが上手側に配置された。この配置にすることでより立体的な音響が得られるとのことだ。また ハフナー・セレナード の演奏に先立って、当時の慣習に従って 行進曲 二長調K.249 が演奏された。アンコールは、クスマウル氏のソロ演奏で22日は「J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第3番BWV1006より“ガヴォット”」、23日は「J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番BWV1004より“サラバンド”」。演奏会の最後には、両日も ハフナー・セレナード の第5楽章「メヌエット・ガランテ」が繰り返し演奏された。

なお、11月22日には、市内および周辺市町村の小学生から大学生までをホールに招いて、公開リハーサルが実施された。《中村》

アンケートから ライナー・クスマウルの非常にやわらかな音が良かった。 ハフナー・セレナード の演奏は水戸室内管弦楽団ならではのすばらしいものであった。本領発揮という思いでした。(銚田町:A.O.さん) 管楽器奏者の音のあわせ方が絶妙です。時には雲や霞のようにあらわれて、音楽の雰囲気を変えてしまう……。まさしく魔法の笛吹きたちですね。指揮者がいない時のMCOは、見ていて面白い。なぜなら他の奏者の音や間合いに敏感に反応しながら演奏している様子がよく分るので。(水戸市:S.E.さん) ヴァイオリン協奏曲の第2楽章は特にクスマウルさんの優美で穏やかななんともいえない音色に足の先まで幸福な気分感動で一杯でした。 ハフナー・セレナード も最高に幸せで何も言うことなし。(無記名の方) ヴァイオリン協奏曲での、オーボエとヴァイオリン(クスマウル)とのかけ合いの妙。それにヴァイオリンの音の美しさ。アンコールのバッハのパルティータではヴァイオリンが神がかりに澄んだ音色でした。(港区:N.O.さん)

1~4. 水戸室内管弦楽団第55回定期演奏会 5~8. 水戸室内管弦楽団第56回定期演奏会



*nettama=ネットワークする猫、タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いろんなところへnettamaします。

大吉リクエストのゆくえ

大吉、大吉、大吉でございます！ 禍福しい事件あいつぐこんな世の中だからこそ、楽しいことをどんどん自分たちの手で創り出したいというもの。というわけで、お客様からの希望によりスタートしたニュー・イヤー・コンサートの新企画「ニュー・イヤー・大吉リクエスト」第1回は「あなたの聴きたいヴァイオリン曲」。皆様ご応募ありがとうございました。Webにも多くの応募が集まって、スタッフのたまみさんも大喜び。お手紙とメールをいくつかご紹介しましょう。

まずは水戸市の海老根 聡さん。「ヴェニヤフスキ:モスクワの思い出 作品6 / 大ヴァイオリンの曲なので、華麗なテクニックがつまみます。また、ロシア民謡 赤いサラファン の変奏曲が美しいです。ひとつで二度おいしい曲です。寒い水戸の冬を暖かくしてくれる曲だと思います」季節ものでシブきましたねー。僕も厳冬期のモスクワに行ったという恐るべき思い出があるけど、とことん寒い土地だと、部屋のあたたかさやウォッカの熱さがほんとうに尊く感じられるものですね。つづいて水戸市のペンネーム「まおピー」さんから。年齢は本人のご希望もあり公開しませんがまだ小学生の方。「ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ 春 第1楽章 / テレビで、千住真理子さんが、この曲のひき方を教えていました。その時、わたしは、とてもきれいな曲で、自分がヴァイオリン、お姉ちゃんがピアノで演奏できたらいいなと思いました。でも、ヴァイオリンはむずかしくて、今は、ピアノを練習しています。これは、ヴァイオリンで一番好きな曲です。」まおピーさんいいアイデアがあるよ！ 君がピア

ノ・パートを練習して、誰かヴァイオリンの人といっしょに演奏するんだ。この曲、ピアノ・パートもすごくきれいだぞ。つづいて異色のリクエストは東京都の友部衆樹さんから。あれっこの人音楽雑誌の編集者の方じゃないかな？「宮城道雄: 春の海 / 伊福部昭:ヴァイオリン・ソナタ / 原博 シヤコンヌ / 以上「ウィーン」というテーマには合いませんので、無効票になるだろうと思いますが、ひとつの提案です。日本で聴く「ニューイヤー」が、どうしてワルツやポルカばかりなんだろう、という疑問があるからです。いつか機会を設けて、ぜひ日本人作曲家による「ニューイヤー」を開いて欲しいものです(後略)」おぉ、鋭いご提案。大吉リクエストは別にウィーンがテーマではないので、無効じゃないですよ。コンサート自体のテーマがなぜウィーンかについては企画紹介で説明されているが(説明になってないぞという声もあるが)ニューイヤーは毎年いろんなテーマでやってるし、友部さんのご提案も大いに参考とさせていただきます。ほかに紙上公開OKのお便りはあるけれど、それを公開すると人気を集めている曲がわかってしまうからなあ。ごめんなさい。というわけで「大吉リクエスト」いかなる曲が人気ナンバー1となるか、それはNYC当日のお楽しみなのであります。

引き続き、嬉しいメールが届いたのでご紹介。長野県諏訪市にお住まいの、小口昭彦さんから。この方は東京から地方にお住まいを移されたのでDMを停止いただいても結構です、というご連絡がたがたお便りくださった。抜粋してご紹介しましょう。「以前は毎年1~2回、水戸室内

管弦楽団の演奏会に行っていましたが、ここ数年ご無沙汰しております。実演を聞いているときには、「世界的にはまだそれほどの知名度がなくても、自分が今存在するこの時間は、世界中でも最も贅沢である」と思っていました。(中略)この経済状態の中で、特に厳しい地方を中心とする中で、水戸室内管弦楽団が、何よりもその活動を続けていくことを、心から願っています。小澤征爾や内田光子はもちろん、世界というレベルで考えた時、水戸室内管弦楽団や安永徹の存在を忘れることはできませんし、心から誇れる、日本の秘宝だと、私は考えています。そして、何よりも、吉田秀和。私にとっては、心から「先生」と呼べる存在です。もちろんお話をしたこともありませんが、コンサートなどで見かけて、心の中で「いつまでもお元気で」と話しかけています。そのような、私にとって重要な人達に関わることによって作り上げてきた水戸芸術館にも、心からのエールを送りたいと思います。(中略)今の地方財政を考えると、予算の面でも苦労が多いのではないかと推察します。しかし、文化というものが人間の精神世界の向上と、いかに結びついた重要なものかを証明していくためにも、「文化における良心の牙城」として、これからも頑張っていたきたいと思います。」

小口さん、ありがとうございました。小口さんがまたいつかこの水戸芸術館においでくださる時、前よりもいっそう元気な水戸芸術館をお見せしたい、と思っております。一同楽しみにお待ちしております。

さて、この号が届く頃にはもう年末そして新年。あわただしかった心を除夜の鐘で静めつる来る年がよき年、平和に満ちた年になることを、祈ろうではありませんか。それでは皆さんまた来年！

プロムナード・コンサートの小部屋

昨年スタートした新シリーズ「オルガン名曲ライブラリー」、J.S.バッハ篇2回はおかげさまで大好評。これからいろんなテーマが登場しますので、ぜひコンプリートしていただければ嬉しい限りです。さて第3回のテーマは時代を溯って、バッハ以前の作曲家たち(北ドイツ・オランダ篇1)。バッハにもっとも直接的な影響を与えた北ドイツとオランダのオルガン音楽の名作を集めました。疾風怒濤の迫力に驚くブルーンスの「プレリューディウム ホ短調」のほか、ラインケン「バビロンの流れのほとり」で、ヴェックマン「プレアンブルム ニ調」、作者不詳「シュザンヌはある日」と、「バッハ以前」なんて形容が不要の、個性的な傑作揃いですよー！オルガンは、プロムナード・コンサートをはじめ芸術館のさまざまな企画に登場、近くはハルモニウムで出演したATMアンサンブル第18回演奏会の記憶も新しい椎名雄一郎さん。2002年北ドイツ放送局音楽賞オルガン国際コンクールの覇者・椎名さんの力演にご期待ください。

《矢澤》



プチ情報 速達

ふだんコンサートホールに足を運びにくい方々のもとへお届けする、音楽のおくりもの。毎年恒例・専属楽団メンバーによる「訪問コンサート」、今年度も実施します。今年度はMCOのヴァイオリニスト川崎洋介ら3名によるピアノトリオ、つまり「ちよっとお昼にクラシック」のメンバーが登場です。2004年2月3日(火)、水戸市身体障害者通所授産施設のぞみ、県立こども病院の2箇所を訪問します(一般の方の入場はございませんのでご注意ください)。彼らの演奏を聴きたい方はぜひ「ちよっとお昼にクラシック3」へどうぞ！

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸【FM水戸アップデート】火曜日18:15頃~15分ほど(不定期登場) 水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

チケット・インフォメーション 1月10日(土)発売分

東京オペラグループ公演 喜歌劇 奥様女中
3/27(土)17:00開演 料金(全席指定):A席¥5,000 B席¥4,000
クリスティーネ・シェーファー ソプラノ・リサイタル
3/21(日)14:00開演 料金(全席指定):A席¥5,000 B席¥4,000
ナタリー・シュトゥッツマン コントラルト・リサイタル
5/22(土)18:30開演 料金(全席指定):A席¥5,000 B席¥4,000
クリスティーネ・シェーファーとナタリー・シュトゥッツマンの2公演のセット券
:A席¥8,000(限定200セット)

1月18日(日)発売分

合唱セミナー2004 講師:松下耕
3/14(日)10:00開始 参加費(全席自由):一般¥1,000 高校生¥500
中学生以下¥300
ファジル・サイ ピアノ・リサイタル
4/18(日)14:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000
近藤 良と仲間たち
4/25(日)14:30開演 料金(全席自由):¥3,000

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央
ブロック 左右...裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

ニュー・イヤー・コンサート2004 1/5(月) ...補助
兼氏規雄 クラリネット・リサイタル 1/17(土) ...自由席
畑中良輔の日本のうた セミナー 第3期 1/18(日) ...自由席
ATMアンサンブル第19回演奏会 2/1(日) ...中央、左右、裏
ちょっとお昼にクラシック3 2/6(金) ...自由席
現代音楽を楽しもう - XVII アンサンブル・ノマド
2/21(土) ...中央、左右
小杉武久コンサート 2/29(日) ...自由席
12/11(木)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケット
カウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生
証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公
演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な1・2月のスケジュール

コンサートホールATM

ニュー・イヤー・コンサート2004 ウィーン、夢の輪舞
1/5(月)18:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000
兼氏規雄 クラリネット・リサイタル
1/17(土)18:30開演 料金(全席自由):¥3,000
畑中良輔の日本のうた セミナー 第3期 「中田喜直」
1/18(日)14:00開始 料金(全席自由):¥1,500
ATMアンサンブル第19回演奏会
生誕150周年記念 - ヤナーチェク、生命の森の音楽 -
2/1(日)18:00開演 料金(全席指定):A席¥3,500 B席¥2,500
ちょっとお昼にクラシック3
ピアノ・トリオの大旋風! ~ 世界を目指す若き才能 ~
2/6(金)13:30開演 料金(全席自由):¥1,200(ドリンク付)
現代音楽を楽しもう - XVII アンサンブル・ノマド
2/21(土)18:30開演 料金(全席指定):¥3,000
小杉武久コンサート メディア・ミックス
2/29(日)14:00開演 料金(全席自由):大人¥1,000 小・中・高生¥500

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート
1/24(土)13:30/15:00 1/25(日)12:00/13:00
2/1(日)12:00/13:30 2/8(日)12:00/13:30 2/22(日)12:00/13:30
「オルガン名曲ライブラリー」
パッサリ以前の作曲家たち(北ドイツ・オランダ篇Ⅰ)
1/31(土)13:30/15:00 出演:椎名雄一郎
入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

『THE SECRET GARDEN』-改訂 パベルの図書館 -
1/16(金)19:00開演、1/17(土)19:00開演、1/18(日)14:00開演
1/23(金)19:00開演、1/24(土)19:00開演、1/25(日)14:00開演
料金(全席自由):一般¥2,500 学生¥1,500
優秀映画鑑賞推進事業 日本映画が好き2004
2/14(土)10:30~「女の園」13:30~「野菊の如き君なりき」
2/15(日)10:30~「生きる」13:30~「天国と地獄」
料金(全席自由):¥500(当日の出入り自由) 1/8(木)チケット発売
14日、15日とも「日本映画が好き2004」終了後、上映会「シネマライダー」を
開催します。詳しくはお問い合わせください。(問)NPO法人シネマパンチ
TEL/029(303)2360
水戸市民舞踊学校 修了公演
2/28(土)19:00開演、2/29(日)14:00開演 料金(全席自由):¥1,500
1/17(土)チケット発売

現代美術センター

「YES オノ・ヨーコ」展
10/25(土)~1/12(月・祝)9:30~18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日 ただし、1/12(月)開館 年末年始12/28(日)~1/3(土)
「Living Together is Easy」展
1/24(土)~3/28(日)9:30~18:00(入場は17:30まで) 休館日:月曜日
入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600 中学生以下、65歳以上、
各種障害者手帳をお持ちの方は無料

茨城の主な1・2月の演奏会

常陽藝文センター TEL/029(231)6611

須川展也 サクソフォンリサイタル2004
1/17(土) 14:00開演 (問)永江楽器水戸店 TEL/029(226)6540
川井郁子 ヴァイオリンコンサート(藝文友の会会員優待催事)
2/7(土) 18:30開演
茨城演奏家連盟 第6回定期演奏会
2/11(水)13:30開演 (問)茨城演奏家連盟事務局 TEL/029(224)3723
水戸市民会館 TEL/029(224)7521
イ・ソリスティ・イバキ室内合奏団 CONCERT! 04 2/29(日)14:00開演
ひたちなか市文化会館 TEL/029(275)1122
清水美和 ピアノリサイタル 1/12(月)14:00開演
ひたちなか市芸術祭/ひたちなか市民オーケストラ 第22回定期演奏会
1/25(日)14:00開演
第24回日本フルートフェスティバル in 茨城 2/22(日)14:00開演
日立シビックセンター TEL/0294(24)7711
第9回 ニューイヤーオペラコンサート 1/11(日)14:00開演
オペラ・レクチャー・コンサート 谷川俊太郎 谷川賢作 詩と音楽とオペラと
2/18(水)18:30開演
アコースティック・ジャズの世界 室内楽団 八向山 2/27(金)18:30開演
日立市民会館 TEL/0294(22)6481
第16回ひたち童謡のつどい 第2部 ヒロシ ピアノ ライブ
2/22(日)14:00開演
常陸太田市民交流センター・パルティホール TEL/0294(73)1234
羽田健太郎&足立さつき デュオ・ファンタジー 2/7(土)18:30開演
ギター文化館 TEL/0299(46)2457
ハビエル・ガルシア・モレノ ギターリサイタル 2/29(日)15:00開演
Jパホール TEL/029(852)5881
つくば新春ガラコンサート2004 1/6(火)18:30開演
(問)つくば都市振興材団 TEL/029(856)7007
アンサンブル音楽三昧コンサート NO.24 1/16(金)19:00開演
(問)オフィス アルシュ TEL/03(3952)8788
スティーヴン・コヴァセヴィッチ ピアノリサイタル 1/24(土)15:00開演 (問)
つくばコンサート実行委員会 TEL/029(852)6470
鹿嶋勤労文化会館 TEL/0299(83)5911
エリック・ベルショ ピアノエレガンス 1/23(金)18:30開演
玉里村総合文化センター TEL/0299(26)9111
舞台創造集団「大太」とたまり創作太鼓演奏会 1/24(土)14:00開演

水戸芸術館音楽紙【ヴィーヴォ】 2004年1月発行 第96号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):関根哲也 中崎美智代 中村 晃 馬場千恵

矢澤孝樹(編集長)

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...3月のATMは女性上位?